

機鋒

TOUGEN NEWS

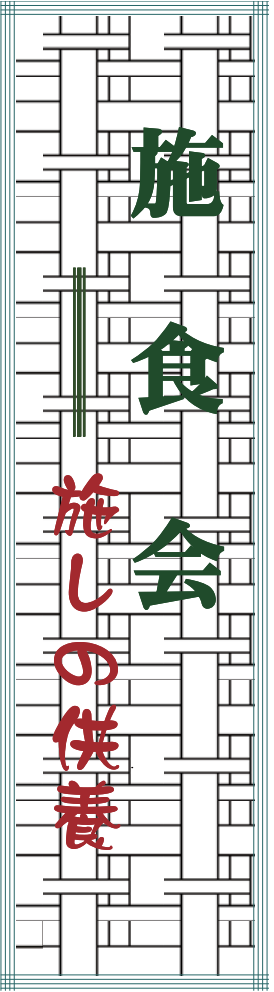
6月1日(水曜日)

発行所 桃源院
 発行責任 桃源院 広報部
 〒191-0065 日野市旭が丘1-10-4
 編集 桑原賢龍 田中文高
 桃源院アドレス
<http://www.momo.or.jp/>

天童寺

天童寺は中国浙江省寧波市の東部にある、中国でも随一の規模をもつ寺院で、一九八三年中国漢族地区の仏教重点寺院と定められました。山並みを生かした敷地面積七、六万平方メートルを持つ大変広大な寺院で、天で、天王殿・大雄宝殿・法堂および鐘樓などを含めると建造物は九九九棟あります。宋代・明代には「中華禪宗五山」の一つに数えられました。

寧波市は古くから重要な貿易港です。唐代以来、天童寺はずっと寧波の対外文化交流地点となり、とりわけ日本と東南アジアに大きな影響を与えました。古くから数多くの日本の名僧が参拝し、修行しにきました。道元禪師は一二三三年に入宋、天童寺十三代住持如浄禪師に師事し、悟りを開いて一二二七年に帰国。福井県で永平寺を開山、曹洞宗の開祖となりました。中国僧別山祖智禪師は天童山景徳寺の火災焼失による復興のために十四世天童寺住持となりましたが、頃を同じくして、樵谷惟仙禪師が再度入宋して天童山に入り、別山祖智禪師の会下に参じました。一二四六年、鎌倉建長寺開山蘭溪道隆と同船帰国して後、安楽寺を開きました。幼牛忠仁禪師は樵谷惟仙禪師にしたがって来朝して安楽寺二世となった中国僧です。十五世紀日本の山水画を極めた雪舟は一四六七年天童寺へ入り、禪の修行をして浙派の山水画風に近い名面を描いて、明代憲宗皇帝に天童第一座を賜りました。中国三大森林公園の一つ天童森林公園は一九九五年国家森林公園として認定されました。敷地面積は四三〇ヘクタールに達します。天童風景名勝区は毎年60万人を超える国内、国外観光客を迎える仏教観光リゾートとして発展しています。



◇施食会とは、お釈迦様から伝わる経文を唱えることにより何百億倍にも膨れ上がった食べ物を、ありとあらゆる霊に施す法要です。

◇「くあまねく十方窮尽 虚空周遍法界 微塵刹中 所有国土の一切の餓鬼に施す」先祖代々の法要が始まる前に読まれる「甘露門（かんるもん）」の一節です。和文と呪文で構成されているので、親しみやすいのではないのでしょうか。本堂には、須弥壇（しゆみだん）と向かい合って施食棚が設けられ、「三界寓霊」すなわち欲界・色界・無色界のありとあらゆる霊に数多くの食事や供え物が施されるのです。呪文を唱えながら方丈様が次々とお焼香してまいります

◇さまざまな災害の多かった日本では、ご先祖様

私たちは地震や津波、台風、冷害に襲われ、飢えや疫病に苦しみ、犠牲となった多くの方々の追善供養が河原や寺院などで繰り返し行われてきました。これが施食会の原形です。

◇「餓鬼」という言葉から何を連想するでしょうか。やせ細った手足、どす黒い風貌、お腹だけが膨らんでいて飢えに苦しんでいる・・・そんなイメージでしょうか。けれども、もともとは「死せるもの」を意味しました。そして、ご先祖さまの霊はもとより供養に恵まれないあらゆる霊に施しをしてきたのです。ご先祖さまばかりでなく、

すべての霊を救済すること、その願いが亡き人を喜ばせ、同時に私たちの生命が周りの多くの生命によって支えられていることに改めて気付きます

◇「餓鬼」には、別の意味があります。

味が入ってききました。それは六道輪廻思想の「餓鬼世界」の住人です。こちらについても考えてみましょう。仏典によれば餓鬼には、無財餓鬼、少財餓鬼、多財餓鬼の三種類あるそうです。無財餓鬼は、お腹が空いているけれども、食べようとすると炎となり、食べることもできない餓鬼。少財餓鬼は、ごく僅かだけ食べるのが許されている餓鬼。しかし、最後の多財餓鬼は富める餓鬼であり、美味贅沢を許された餓鬼です。なぜ多財餓鬼が餓鬼なのか。餓鬼の特徴はすさまじいまでの食欲です。とすれば飢えによって象徴されるよ

す。豪華なご馳走を前にして、満足を得られなければ餓鬼なのです。私利私欲だけにとらわれ、他への施しなど考えも及ばないはずです。

桃源院本院 施食棚



りむしろ満足を満足としらず、無尽蔵の欲望によって特徴づける方が自然です。風貌はかっこよくても、またどんな地位にしようが、どこに住んでいようが、ガツガツと食欲であれば餓鬼なので

◇私たちはとても忙しい毎日を送っています。そして、古来より培われてきた大切な風習を忘れてしまいがちです。けれどもこの季節にふと思いついてみることは必要ないでしょうか。

慈悲の痛棒

大愚宗築(たいぐそうちく) 「二五八四」～「一六六九」

臨濟宗。美濃(岐阜県)武儀郡の生まれ。俗姓武藤氏。大愚は号。十一歳の時美濃乾徳寺で得度、京都妙心寺雜華院の一宙東黙に参して後、南泉寺の智門玄祚の法嗣となる。江戸南泉寺を開き、美濃南泉寺五世となる。また近江円鏡寺を開き、丹波慧日寺、京都妙心寺に任じて、播磨法幢寺の復興、但馬雲頂山の再興をした。後に越前大安寺開祖となり、諸相非相禪師と特賜された。

室町から戦国を経て江戸の初頭に至る約二百年間には、日本の臨濟は概していえば、妙に文化的になってしまひ、本幹を離れ枝葉をもてあそび、権力者や貴族をパトロンに持って、まるで茶坊主のようなことをしていた。ところが江戸時代の初期に入ると、それが突然として復興の機運に向った。その代表的な古哲は先号で紹介した雲居、そして愚堂、大愚の三人の僧である。いずれも傑出した高德だった。

いまはそのうちの大愚を紹介したい。大愚という古哲について書いてみたいと思う。江戸時代初期の人だが、一風変わった人生を歩んだ僧である。

師、すなわち人天の大善知識なのである。大愚は美濃(岐阜県)の国、武儀郡の出身である。天正十二年の生まれだ。これは一五八四年、秀吉と家康が長久手に戦った年である。十一歳のときに故郷の乾徳寺の状元という和尚について頭を丸め得度した。ところが十七歳のとき関ヶ原の戦いが起つて師の状元と一緒に逃げだし、戦いがしずまった後に大愚は一人で行脚の旅に出て、諸方の長老を訪ねて身心を磨いた。

そしてこの人こそ思う正師にめぐりあうことができた。それが京都妙心寺の雜華院の住職一宙東黙禪師である。一宙の門からは英傑雲居が出ている。雲居は前号で述べたように、仙台の伊達公に迎えられて松島の瑞巖

寺に住し、数々の逸話を残した大和尚である。それからまた一宙の門には鉄牛もいた。鉄牛は世にも名高い塙団右衛門である。鉄牛は大坂の陣のとき

きくに再びもとの塙団右衛門に戻って大阪城に入り、前号のように壮絶な討死をしたのである。大愚もこの一宙の門で勉強した人だ。

数年の後、同門の雲居や愚堂と一緒に東に遊び、ついで奥州(宇都宮)に足をのぼしたときに、旧師の状元和尚が亡くなったという報せを受け、大急ぎで故郷の美濃に帰り、状元の法嗣である智門から嗣法して、その後しばらく乾徳寺にいた。

それから京都の妙心寺に入つて、その第一座(首座)をつとめた。そのうちに江戸の旗本たちが江戸に南泉寺(今の荒

川区西日暮里)を建てて、大愚をその開山第一世として招請したのである。このとき大愚は三十二歳であった。三十二歳で寺院の開山第一世になるといふのはいくら昔でも珍しいことで、大愚がいかに俊秀であったかの証拠である。また、今の東久留米にも米津寺を開山している。

若くして、花のお江戸で一寺の住職に出世した大愚は、檀信徒から非常に信頼され、大変評判がよかった。ところが或る檀家の葬式に行つた日に大変なことが起つた。亡くなったのは、その家の一粒種の跡取り息子だった。一家一門の嘆き悲し

む様子は見るに堪えないほどで、彼らは棺桶にすがつて慟哭した。

大愚和尚はその慟哭のなかで、故人に向つて懇切に法を説き、おごそかに引導をわたし、とどこおりなく葬儀を終えて南



西日暮里の南泉寺



東久留米の米津寺



泉寺に帰った。すると死んだこどもの母がやつれ果てた姿で訪ねてきた。大愚和尚を伏し拝んでぼろぼろ涙をこぼしながら、

「和尚さまの有りがたい引導によりまして、子供もこの世の執着から解かれて、心安らかになれたことと……和尚さまのご慈悲に何とお礼申してよいやら……」

「いやいや、拙僧はただ心をこめてお勤めをしただけのこと、わざわざお礼にお出かけになるには及ばなかったもの……」

「はい、ただ生き残りましてあの子の母として、どうかして知っておきたいと思えます、和尚さまの引導によりまして、あの子は……」

こう言っ、老いた母親は声をつまらせ涙にむせんだ。それから少し落ち着いてから言っには、「和尚さまの御導きで、

あの子は何処へ行ったのをごさいますか。愚かな母の願いです。どうか、あの子の行方を教えてくださいませ」

「それはその、じつは、拙僧にも……よくわかり申さぬ」

そこで母親は嘆き悲しむこと限りなく、「わが子が本当に浮かばれたかどうか、ここらもとないでございませ」

といつてさめさめと泣き、そのまま落涙しながら帰って行った。

「一婆子あり、子を失う。師の教えを請いていわく。幸に和尚の慈悲を蒙りし我が子、今何処にかゆく。師則ち思えらく、自ら得たりと、今導師たるに及んで他（その子）の落処を知らず、住持是れ何の意ぞ」

自分は日頃、自ら得たり……すでに悟りを得たと思っていたのに、亡くなった魂の行き先すら知らずに、ひとことも答えてやることのできないとは、何という恥ずかしいことだ。これで住職などとは、情けない情けない。大愚はその母の帰ったあと、一人方丈（住職の部屋）に坐って悲憤の



涙に暮れた。そうしてその夜のうちに孤影悄然として寺を出て、あてもない雲水の旅に出たのである。

どうだろう、大愚の精神の純潔さを。当時、大愚はすでに多くの経論を読み、多くの知識も蓄えていた筈である。けれども、最愛の一人息子を亡くして悲嘆にくれる母親を前にして、借りてきた知識を並べ立てることはとてもできなかったのだ。借りた知識は、何の用もなさなことに気がついたのだ。それをごまかさずに正直に認めたの



は、純潔で正直な心であった。そうして一寺の開祖という名譽も、住職という地位もあっさりといち擲して、ただ一介の乞食坊主になったのである。

雲や水のように流れて、ついに三州（三河）に着き、ここに草の庵を結び、全てを放下して何年も何年も坐りつづけた。それでもなお胸中に晴れやらぬものがあってここを去り、それから近江の国の山奥の閑寂な環境を頼って瞑想を続けた。

しばらくして、その国の領主、堀田信濃守が、寂然として端座する大愚の姿に帰依して、その地に小院を建てて寄進した。その小院に入っても、大愚はなお修行をつづけて、一夜、廓然として証徹し、自己の身心を縛っていた一切から解脱した。



に集り、小院の室外にもあふれるようになった。

出家もあり、在家もあり、男もあり、女もあり、彼らはこの稀有の高徳を慕って熱心に仏法を求めた。名声は更に高くなった。しかし大愚は時の野狐禪、茶坊主禪、文字禪、死禪を罵倒して一大改革の狼煙をあげたのであった。

さて、名声を妬むのは古来、坊主たちの常である。その妬みに怒りや憎しみが加わって、大愚の身辺にはさまさまの中傷やデマが乱れ飛んだ。大愚というやつは男と女と一緒に寝起きさせ、男僧と尼僧をも同じ部屋に雑居させているという噂がひろがった。今日の男女共学の時代ならまだしも当時としては常識外の状態であったのだ。世



参考

ある説によると、似たような出来事は江戸の南泉寺時代にもあったという。雲州（出雲）の大名家、堀尾侯に松虫・鈴虫という愛妾が二人いたが、この二人とも侯に仕える眉目秀麗な小姓と密かに情を通じた。それが露見して小姓は直ちに首を打ち落とされたが、二人の愛妾は逃げて南泉寺に身を隠した。大愚は憐



れんで、二人を剃髪して尼さんにし、時を計って二人を他国に逃れさせた。

かねてから、大愚の名声を妬み、憎んでいた坊主たちが、あらぬ噂を噂き散らして歩いた。大愚和尚は二人の美女を囲っているといい、あげくの果ては、二人の美女が一人の坊さんにしなだれかかっている妙な絵を書いている、それを売り歩かせるという、いまなら週刊誌に嘘の情報を流すようなあくどいこともやった。そうこうしているうち大愚はどうとう宗門から追放されたという。

いずれにせよ、大愚は無実の罪によって、宗門の活動は出来ないことになった。弟子たちは悲憤やるかたなく、公儀に訴え出て堂々と汚名をそそぎ、名誉を回復すべきだと主張してやまなかった。弟子たちの気持ちも考慮して、名誉毀損の訴えをするために先ず京都にのぼることになった。



京都 妙心寺

しかし旅の途中で大愚は馬鹿らしくなり、さっさと近江に舞いもどった。

一説では、議論沸騰のなかで上洛のことをきっぱり拒絶したともいう。どちらにしても大愚の心中は、

「時節到れば理おのずから現わる。もし口を開かんと擬すれば、早く是れ我が宗を汚染し了れり」と

というのであった。申し開きをすること自体が口の穢れであり、禅門の恥だということである。

やはり、事ここに至って近江（滋賀県）は住みにくくなったらしく、大

愚は近江を去り、やがて丹波の国にやってきて、無住の荒れ寺に入り、慧日寺と名づけて、ここでさらに大修行をつづけた。世のなかの噂などは一切念頭になく三衣一鉢の生活である。世間の俗塵から遠く離れて、孤独に堪えて修行をつづけた。当時の一偈にいわく、

更に朝市の累なし
何ぞ是非の争かあらむ

秋は深辺の葉を掃い
春は樹下の鶯を聞く

ところが不思議なことに、いつのまにかこの荒れ寺に求道の者たちが大勢参集して、その法座は

次第に盛んになった。しかしこの時から、彼の指導はこれでもかと言わんばかりの厳しさに変わり、その機鋒は辛辣で少しの容赦もなく、落雷のごとくに大喝し、雨降るが如くに痛棒（警策）を打ちおろした。それでも法徳を求める者が続々と集まったのである。

「旧臘既に尽きて、新年將に至らんとす。汝ら諸人、旧時の面を改めず。如何ぞ又春に逢わむ」と言った。

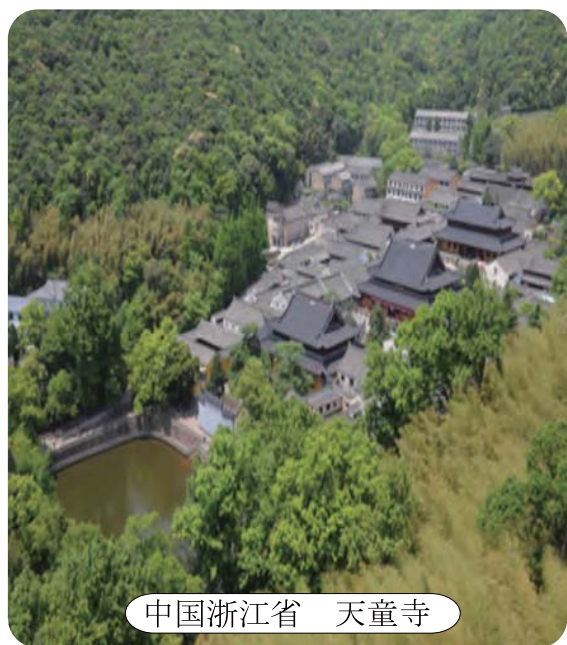
今年も終わり、新玉の年が始まろうとしているのに、おまえらの面を見ると、相変わらずの、ポ

だすための儀式であったから、どうか今までのわしのやり方を許してくれよ」と頭を下げて言われた。「ときに会下の大衆、感涙衣をうるおす」と道元は語っている。

大愚門下の者たちは、和尚に追い出されて山門の外で一夜を明かした。明けて正月元旦である。お寺の中はひっそりと静まりかえっている。弟子たちは見つからないように、抜き足差し足で境内に入り、なかの様子をうかがうと、和尚は鐘をつき、版をたたき、一人であらゆる年頭の祝いの儀式をしている。それが一通り終わると、今度は偈頌を朗々と唱えはじめた。

曹洞宗の道元の若かりし日、宋の天童山で修行中、師の如浄禅師が一同の前で「わしは坐禅して眠っている者をよく靴で打ったけれども、これは法を護持して本物を打ち

水繞り山囲む獅子の窟
更に異獣の足を措く
処無し
氷花一片大丈夫
春風門に入って推せども去らず



中国浙江省 天童寺

ここは天然の要塞、獅子の住まいである。ほかのけだものは寄せつけぬぞ。しかしこのような厳肅な修行の場所でも、新春の風は飴湯として門より入りきて、情も容赦もないこの獅子のような指導者である私を温く包んで、だんだん心を溶かし

ていってしまつ。

「和尚さま、この面ではまだいけませんか？」
「まあ、ここへきて坐れ。坐るのはいつものこと、正月になったからって、すこしも変りはしないからなあ」

寛永三年（一六二六年）といえば徳川家光の時代で、長崎の奉行、水野守信がギリシヤン弾圧のひとつの方法として「踏絵」というものを考案した頃、あの有名な南海坊天海が口を利いたともいわれているが、とにかく大愚和尚の僧籍復帰が認められた。無実の証しが認められる時節因縁が向こうからやってきたのである。このとき大愚は四十三歳、擯斥の刑に処せられてから七年が経っていた。

その後、妙心寺に住していたとき、越州（越前・越中・越後の総称）侯の招待を受け、たまたま隠元と同席した。隠元が明国からやってきたのは四代將軍家綱のときで、のちに宇治に黄壁山万福寺を草創し、その第一世になったことはよく知られている。だからこの話は大愚の晩年のことである。隠元は大勢の貴族パトロンに帰依で、当時大変な人気の僧であった。

食事中、隠元が箸を飯器にまっすぐに立てて、大愚をにらんで言った。

隠元「見る麼」
大愚「見る」
隠元「箇の什麼をか見る」

大愚「汝が檀那に詔うて、七転八倒するを見る」

大愚は遠慮会釈もなく明国という、当時最強の先進文化国家の大人気の帰化僧に向ってこう答えると、列席の人々青ざめて、一語も発せなかったという。

その後、越前（福井県）大安禅寺（福井市の西北に位置する）を万治三年（一六六〇年）に開山し、寛文九年（一六六九年）、四代將軍家綱の頃、大愚は坐ったまま入寂した。入寂のとき、侍者の利脱を呼んだ。利脱が近づくと大愚はいきなり手をのばして、利脱のほつぺたをピシヤリ、一掌を与えた。利脱が驚いてつむった目を開けると、もう和尚は息を引きとっていた。それが和尚最後の激励だったのであろう。寿齡、八十八。



京都 妙心寺



宇治 万福寺



福井県 大安禅寺

平成27年度 桃源院発展布教護持会費報告

平成27年度		平成27年4月1日～平成28年3月31日		
		収入	支出	備考
適用				
護持会収入		3,555,000		
前年繰越金		207,080		
合計		3,762,000		
寺報 布教費				
2015年6月	孟蘭盆号印刷		288,360	
6月	// 発送		848,249	
8月	秋彼岸号印刷		288,900	
8月	// 発送		849,113	
2月	春彼岸号印刷		288,900	
2月	// 発送		849,113	
合計			3,412,635	
修繕費				
2015年4月	紫雲・白雲 カーペット交換		572,000	
合計			572,000	
繰入金		222,635		
合計		3,984,635	3,984,635	0



東日本大震災 復興の証

岩出山 有備館

熊本で続発している強い地震 連日のように地震速報のテロップがテレビの画面の上を流れていきます。その都度「津波の心配はありません」というテロップに安堵するのは、3・11を経験している者の性かも知れません。

あの時の記憶をまた呼び戻すように、土砂崩れ、ひび割れた道路、ダム堤防からの漏水、屋根瓦や石積みが崩れ落ちてしまった熊本城などの衝撃的な映像が次々と流れてくる。被災し家族や家を失った人々の悲痛な嘆き。心よりお悔やみを申し上げ、早急の復興を祈らずにはいられない。

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震により、ここ宮城県大崎市でも大きな損害が出た。大崎市は県内でも海に面していない数少ない市で、津波の影響こそはなかったが震度6強の揺れに多くの建物が全壊・半壊・一部損壊の被害を受けたのです。

桃源院本院の本堂も250年の歴史に終止符をうたざるを得なかった大地震の被害からの復興を、やっと先年の秋に終

えたばかりです。大地震から5年が経過して大崎市から徐々にあの傷跡が消えつつあるところです。

その大崎市の歴史的な建造物である「有備館」もこの春、全壊からの復旧工事が完了したとの朗報が地域を駆け巡りました。



東日本大震災では、文化財そのものが地震や津波で全壊した例も多い。江戸時代初期の1677年頃に建てられた岩出山伊達家の学問所は、茅葺き屋根に完全に押しつぶされてしまった。

土煙とともに倒壊

あまりの大きな土煙に、道路の向かい側の駅にいた人は「火事になったのかと思った」という。幾度の修繕はあったものの、大きな災害にあわず300年余りに渡って守られてきた地域のシンボルが、轟音とともに倒壊した瞬間だった。



有備館の歴史 は、伊達政宗の時代までさかのぼる。

1591年、米沢から当地に移った伊達政宗は、当地を岩出山と改める。関ヶ原の戦い後に仙台に移った政宗に代わり、岩出山の領主となったのが四男の宗泰（おねやす）。岩出山伊達氏の初代当主である。

二代当主・宗敏（おねとし）が隠居所として1677年頃に建築したのが、この有備館だ。その後、岩出山伊達家の家臣子弟の学問所として使われるようになった。

見事な日本庭園は、1715年に造られた。池の中に島を配した廻遊式の庭園で、四季を通して咲く花が絶えないように設えている。

明治維新のころまで学問所として使われた後、伊達家の住まいとなり、昭和8年に国の史跡名勝として指定。永きにわたって岩出山地区のシンボルとして親しまれてきた。

